日本病院薬剤師会関東ブロック第54回学術大会

ランチョンセミナー10

患者発信から始まる外来がん化学療法

～ヘルスケアパスポート®から発信される バイタルと副作用症状へのチームアプローチ～

2024年

8月11日 日 11:30-12:30

第5会場 パレスホテル大宮 3F チェリールーム東

〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町１丁目７－５

座長

町田　充 先生

さいたま赤十字病院　薬剤部長

演者

平井　成和 先生

東邦大学医療センター佐倉病院 薬剤部

横山 晴子先生

株式会社アシスト あやめ薬局下志津店

共催 日本病院薬剤師会関東ブロック第54回学術大会
東和薬品株式会社

患者発信から始まる外来がん化学療法
～ヘルスケアパスポート®から発信される バイタルと副作用症状へのチームアプローチ～

東邦大学医療センター佐倉病院 薬剤部

平井 成和

株式会社アシスト あやめ薬局下志津店

横山 晴子

外来化学療法が主流となった現在、病院薬剤師-薬局薬剤師間の患者情報やレジメンの共有による薬薬連携の推進が、治療の安全性や質の向上につながると期待されている。昨今、薬薬連携関連の加算新設や、がん領域の専門医療機関連携薬局の認定が開始され、更なる連携の必要性および重要性が高まっている。

また、近年の医療DXの推進により、Personal Health Record (PHR)機能を搭載したアプリが利用できるようになってきた。PHRは、個人の生涯にわたる保険医療データや検診結果の把握が可能であることより、健康情報等を電子記録として本人や家族が正確に把握することができ、ヘルスケアに活用することが期待されている。つまり、健康記録としての利用である。さらに、本来機能を利活用することで、電子版患者報告アウトカム(ePRO：electronic Patient Reported Outcome)を用いた有害事象モニタリングに使用され、がん患者のQOL向上や有効性・安全性の改善に有用であったことが報告されている。

以上より、PHRの利活用は非常に有意義であると考えられるが、がん薬薬連携における活用事例は限られているのが現状である。そこで我々は、PHRの一つであるヘルスケアパスポート® (以下HCP)にePROの機能を搭載した上で、がん薬薬連携における本アプリケーションの有用性や、地域展開可能なノウハウの確立を目指した検証実験を計画した。

現在、HCPを活用した外来がん化学療法におけるリアルタイムな副作用モニタリング、副作用発現に対する介入を病院・薬局薬剤師がチームとなって取り組みを行っており、各々の立場から、治療への関わりや役割について紹介する。さらに、今後の展望等について紹介する。

【HCP活用の概要】HCPでは利用者による記録情報を連携した医療機関内で共有可能であり、施設間メッセージ機能が組み込まれたプラットフォーム。ePROの機能として12項目の副作用（重症度別に入力可能）を組み込み、日々の体調や副作用を患者（家族）が入力する。薬局薬剤師によるリアルタイムなバイタル、副作用のモニタリングや必要に応じたテレフォンフォローアップ等を実施して、薬局薬剤師-病院薬剤師との連携、さらには病院薬剤師から担当医への情報共有・処方提案に繋げる。